翻訳（訳注）

張果関連文献訳注稿（上）

川口喜治

【キーワード】張果、旧唐書、新唐書、太平広記

はじめに

本稿は、盛唐の道士である張果に関する基礎的文献に訳注を施したものである。

張果は、のちに八仙の一人として数えられることで有名である。(注1)

唐突ではあるが、筆者は、ここ数年来、盛唐の詩人である李頎について研究を進めてきた。その過程で、李頎が張果に贈った詩が残っていることを知った。更に調べてみると、張果に関する詩歌は、李頎の一首と張果自身の一首しか残っていないことがわかった。

もともと、李頎が張果に贈った詩を解読するために、張果関係の文献に当っていたが、張果に関する研究が少ない上に、八仙の一人に数えられる前の張果の「実像」を語る文献については、ほとんど解読されていないことが判明した。そこでひとまずの研究目的を本訳注稿作成とし、現時点での成果を公開する次第である。

本稿作成においては、『大漢和辭典』、『漢語大詞典』、『角川大字源』をはじめとする各種の工具書、「中國哲學書電子化計劃」をはじめとする各種のデータベースを活用した。中でも、『角川新字源改訂新版』に多大な恩恵を受けている。注の語釈も、『新字源』をそのまま拝借した部分も少なくない。いちいちは記さないが、プライオリティーは、これらの先行研究の成果に存在する。

訳注対象は、正史『舊唐書』『新唐書』張果傳等、『全唐文』『全唐詩』小傳、『太平廣記』「張果」、『宣室志』所収のエピソード、李頎が張果に贈った詩、『全唐文』所収の張果の文、張果自身の詩、である。

右の訳出対象には通し番号を振った。

訳注は、原文、書き下し文、訳(大意)、注の順に示した。

注を付した語彙・語句については、書き下し文に右線を引いて示した。注を付した語が連続する場合や、語彙が訓読によって離れる場合などは、二重線を用いている。なおこれとは別に注の本文においても傍線を用いているが、これはハイライトを意図している。

訳注稿における各種引用文献の書誌については、一番初めに引用した箇所に記した。

なお本訳注稿は、紙幅の関係上、上中下の三篇に分ける。

本稿上篇では、『舊唐書』『新唐書』張果傳等、『全唐文』『全唐詩』小傳の張果傳、『太平廣記』「張果」(一部)を掲載する。なお『太平廣記』「張果」の残りの部分、『宣室志』巻八所収のエピソード、李頎詩の訳注は中篇(注2)に掲載する。張果関連文献の本丸とも言える『全唐文』所収の張果の文、『全唐詩』所収の張果の詩は、下篇に掲載の予定である。

(注1)八仙に張果を数えず、他の仙人を入れる場合もある。野口鐵郎ほか『道教事典』「八仙」(稲畑耕一郎執筆、平河出版社、一九九四年)。

(注2)『山口県立大学国際文学部紀要』二六号、二〇二〇年

一、『舊唐書』『新唐書』張果傳、『新唐書』藝文志、『宋史』藝文志、『全唐文』『全唐詩』小傳

本節では、右の標題に掲げた資料の訳注を示す。張果関連文献における史料

山口県立大学国際文化学部　中国文学
Faculty of Intercultural Studies, Yamaguchi Prefectural University, Chinese Literture.

として最も基本となるものであると考える。

（一）『舊唐書』卷一九一・方伎列傳・張果列傳

【底本】

●中華書局点校本、一九七五年

【原文】

張果者、不知何許人也。則天時、隱於中條山、往來汾晉間。時人傳其有長年祕術、自云年數百歳矣。嘗著陰符經玄解、盡其玄理。則天遣使召之、果佯死不赴。後人復見之、往來恆州山中。開元二十一年、恆州刺史韋濟以狀奏聞。玄宗令通事舍人裴晤往迎之。果對使絶氣如死、良久漸蘇。晤不敢逼、馳還奏狀。又遣中書舍人徐嶠齎璽書以邀迎之。果乃隨嶠至東都、肩輿入宮中。

【書き下し文】

張果は、何許の人なるかを知らざるなり。則天の時、中条山に隠れ、汾・晉の間に往来す。時人　伝うらく　其の長年の秘術有りて、自ら年は数百歳なりと云うと。嘗て『陰符経玄解』を著わし、其の玄理を尽くす。則天　使いを遣りて之れを召さんとすれども、果　死を佯りて赴かず。後の人　復た之れに見い、恒州の山中に往来す。開元二十一年、恒州刺史・韋済　状を以て奏聞す。玄宗　通事舍人・裴晤をして往きて之れを迎えしむ。果　使いに対して気を絶つこと死するが如く、良や久しくして漸く蘇る。晤　敢えて逼らず、馳せ還りて状を奏す。又た中書舍人・徐嶠を遣りて璽書を齎して以て之れを邀迎せしむ。果　乃ち嶠に随いて東都に至り、肩輿にして宮中に入る。

【大意】

張果は、どこの人であるかはわからない。則天武后の時に、中条山に隠棲し、汾・晉の地域で活動していた。当時の人々は、張果には寿命を延ばす秘術があり、自ら数百歳だと称している、と言い伝えていた。ある時、張果は『陰符経玄解』を書き、道家的兵法思想の奥義を極めた。そこで則天武后は、使者を派遣して張果を召しかえようとしたが、張果は死をいつわり、武后のもとに向かわなかった。後の時代の人が張果に会ったときには、彼は恒州の山中で暮らしていた。開元二十一年（七三三）、恒州知事の韋済が張果のことを文書によって皇帝にご報告申し上げた。玄宗は、通事舍人の裴晤を出向かせて張果を迎えようとした。張果は、使者に向かって息を絶って死んだようになり、かなり時間が経って徐々に息を吹き返した。裴晤は執拗に迫ることはせず、急ぎ都に戻り、報告書を皇帝に献じた。玄宗は、今度は、中書舍人の徐嶠を派遣し、御璽で封じた詔を持参させて、張果を招き入れようとした。張果はそこでようやく徐嶠について東都・洛陽にやって来て、輿に乗るという待遇で宮中に入った。

【注釈】

●中条山：洛陽と長安のあいだに位置する陝州（治・陝県、河南省三門峡市）の北、蒲州（治・河東県、山西省永済市西）との境に連なる山。『舊唐書』によれば、この山に隠れた士人として、王亀（巻一六四）、陽城（巻一九二）、司空図（巻一九〇下）がいる。

●汾晉：汾水の流域の山西省、太原を中心とした地域。并州・太原府は、治所は太原県と晉陽県（一都市二県制。山西省太原市南）。唐の高祖・李淵の旗揚げの地であり、唐王朝において長安、洛陽に準じる北都として位置づられた（中村治兵衛「唐代における一都市（一州）二県制」、唐代史研究会『中国都市の歴史的研究』、刀水書房、一九八八年）。太原府の南には汾州（治・隰城県、山西省汾陽市）、その南に晉州（治・臨汾県、山西省臨汾市）がある。また汾水が太原府、汾州、晉州を流れ蒲州で黄河に注ぐ。張果の行動は、陸路だけではなく、水路を活用していたと考えられる。

●間：あたり、地域。

●往来：ここでは、試みに、行き来するの原義から推して、活動する、さらには生活する、暮らすの意味に解釈してみる。

●長年：長生きする。寿命をのばす。

●陰符経玄解：『新唐書』巻五九・藝文志三・丙部子録・道家類・神仙に「張果陰符經太無傳一卷。又陰符經辨命論一卷。」と見える。「陰符経」は「道教の経典」（尾崎雄二郎ほか『中国文化史大事典』「陰符経」、大修館書店、二〇一三年、麥谷邦夫執筆）。また、「道家の思想をとり入れた兵法の書」（『道教事典』「陰符経」、福井文雅執筆）。

●玄理：奥深い通り。学説。

●佯死：死んだふりをする。次に「果對使絶氣如死」とあることから、自らを仮死状態にすることができたのであろう。

●恒州：治・真定県、河北省正定県。西に并州・太原府と隣接する。

●開元二十一年：『舊唐書』巻八・玄宗本紀上では「（二十二年……二月……）

辛亥、初置十道採訪處置使。徵恆州張果先生、授銀青光祿大夫、號曰通玄先生。」と開元二二年のこととする。また『舊唐書』玄宗本紀、『新唐書』巻五・玄宗本紀とも、玄宗は開元二二年に洛陽に至り、二四年十月に長安に還ったとする。してみると、両『唐書』が伝える張果と玄宗のエピソードはこの期間にあったと推定される。

●韋済：六八八―七五四。宰相・韋嗣立の第三子。杜甫や高適と交遊を持った。韋済が恒州刺史であった時、高適に「眞定卽事奉贈韋使君二十八韻」（『全唐詩』巻二一四）がある（周祖謨『中国文学家大辞典　唐五代巻』、中華書局、一九九二年）。

●状：上奏文の一種。意見や事実を述べる。

●玄宗：玄宗皇帝の道教への深い傾倒については、窪徳忠『道教史』（山川出版社、一九七七年）、坂出祥伸『道教とは何か』（中央公論社、二〇〇五年）に簡潔明快に記述されている。以下、それらからここと特に関わりの深い部分を要約する。

玄宗は、唐の歴代の皇帝のうちで、道教にもっとも深く心酔した皇帝である。開元九年に、天台山から、茅山派第一二代宗師・司馬承禎を迎えて、法籙を受け、道士皇帝となった。『道徳経』を諸経の首位に置き、開元二一年には一般の人たちの家に必ず毎戸一本を所蔵させ、尚書策や論語策の代わりに老子策を貢挙に加えるように定めた。また二一年に、玄宗は自ら『道徳経』の注を書き、二十三年にはさらに『道徳経』の疏を撰述した。なお窪氏は、唐の皇帝の中で特別であった玄宗の道教信仰には「司馬承禎、呉筠、張果など茅山派の道士たちの力が大きかったにちがいない。」（傍線：川口）と推測する。

さて、開元二一年は、張果が玄宗に招かれた年である。上の「開元二十一年」の注に記したように、玄宗は開元二二年から二四年までの間、洛陽に滞在した。この状況から考えると、玄宗の『道徳経疏』の作成に、張果が全く無関係であったとはいえないのではなかろうか。『新唐書』では張果は集賢院に泊められるとあるが、下記に紹介するように、集賢院学士や道士は玄宗の『道徳経疏』の撰述の主体であった。

堀池信夫氏は、玄宗の『老子注』が「ほぼ自著といえるものである」のに対して「『道徳真経疏』は、玄宗の意を受けた集賢院学士や道士たちが、『道徳経注』の解釈をより発明せんとして著したものであり、奉勅撰といったたぐいのものである。」（「『妙本』の位置―唐玄宗『老子注』の一特質―」、『中国文化　研究と教育』六〇、二〇〇二年。傍線：川口）と述べる。また麥谷邦夫氏は、「玄宗の御注は開元二十年までに一応完成していたが、直ちに施行されたわけではなく、二十一年の「家蔵一本」の詔勅を経て、二十三に疏とともにはじめて集賢院学士のもとに下賜されて検討が命ぜられ、その奏請に基づいて漸く施行された。」「玄宗の御疏というのは、実は御注の作成に直ちに引き続いて、開元二十年に集賢院の学士と若干の道士たちの手によって撰述が開始され、開元二十三年に完成したことが知られる。」（「玄宗と『道徳真経』注疏の撰述」、『六朝隋唐道教思想研究』、岩波書店、二〇一八年。傍線：川口。なおここの「若干の道士たち」には張果は想定されていないようである）と述べる。

●通事舍人：皇帝と臣下の間の様々な取り次ぎ役。『大唐六典』巻九・中書省「通事舍人十六人。從六品上。……通事舍人掌朝見引納及辭謝者於殿廷通奏。京官文武職事五品已上假、使、去皆奏辭、來皆奏見。其六品已下、奉敕差使亦如之。外官五品已上假、使至京及經京過、若新授及駕行在三百里内過、並聽辭見。凡近臣入侍、文武就列、則引以進退、而告其拜起出入之節。凡四方通表、華夷納貢、皆受而進之。……凡軍旅之出、則命受慰勞而遣之。既行、則每月存問將士之家、以視其疾苦。凱還、則郊迓之、皆復命。凡致仕之臣與邦之耋老、時巡問亦如之。」

●裴晤：未詳。『舊唐書』『新唐書』では張果列傳のみに見える。

●中書舍人：「制誥（皇帝のみことのり）の執筆にあたる……重職であったが、詩人の場合には、……〝文士の極任〟と称された中書舍人として文筆の才をふるう者が多かった。」（礪波護「唐の官制と官職」、小川環樹『唐代の詩人―その伝記』所収、大修館書店、一九七五年）。『大唐六典』巻九・中書省「中書舍人六人。正五品上。……中書舍人掌侍奉進奏、參議表章。凡詔旨制敕、及璽書冊命、皆按典故起草進畫。既下、則署而行之。」

●徐嶠：『初學記』を撰した徐堅の子。『新唐書』巻一九九・儒學列傳中・徐齊聃列傳「（徐堅の）子嶠、字巨山。開元中爲駕部員外郎、集賢院直學士、遷中書舍人、内供奉、河南尹。封慈源縣公。父子相次爲學士、自祖及孫、三世爲中書舍人。」

●璽書：皇帝の璽で封印された、皇帝の発する文書（中村裕一『隋唐王言の研

究』、汲古書院、二〇〇三年）。皇帝の招きに応じない張果を呼び寄せるために、更なる手段として、正式な皇帝の文書を出し、また重職である中書舎人を派遣したのである。武則天・玄宗と張果との駆け引きは、「招聘拒絶ゲーム」（大室幹雄『桃源の夢想―古代中国の反劇場都市』第六章「隠者の社会学」、三省堂、一九八四年）の一形態、コピーと捉えてよいであろう。

●邀迎：招き迎え入れる。

●東都：洛陽。

●肩輿：肩でかつぐかご。こし。

【原文】

玄宗初即位、親訪理道及神仙方藥之事、及聞變化不測而疑之。有邢和璞者、善算人而知夭壽善惡。玄宗令算果、則懵然莫知其甲子。又有師夜光者、善視鬼。玄宗召果與之密坐、令夜光視之。夜光進曰、「果今安在。」夜光對面終莫能見。玄宗謂力士曰、「吾聞飲菫汁無苦者、眞奇士也。」會天寒、使以菫汁飲果。果乃引飲三巵、醺然如醉所作。顧曰、「非佳酒也。」乃寢。頃之、取鏡視齒、則盡燋且黧。命左右取鐵如意擊齒墮、藏於帶。乃懷中出神仙藥、微紅、傅墮齒之斷。復寐良久、齒皆出矣。粲然潔白。玄宗方信之。

【書き下し文】

玄宗　初めて即位し、親から理道及び神仙方藥の事を訪ね、変化不測を聞くに及びて之れを疑う。邢和璞なる者有りて、善く人を算えて夭寿、善悪を知る。玄宗　果を算えしむれば、則ち懵然として其の甲子を知る莫し。又た師夜光なる者有りて、善く鬼を視る。玄宗　果を召して之れと与に密かに坐せしめ、夜光をして之れを視しむ。夜光　進みて曰く、「果は今　安くにか在る」と。夜光　対面して終に能く見る莫し。玄宗　力士に謂いて曰く、「吾聞く　菫汁を飲みて苦しむ無き者は、真に奇士なり」と。会たま天寒く、菫汁を以て果に飲ましむ。果　乃ち引きて飲むこと三巵、醺然として酔いの作す所の如し。顧みて曰く、「佳酒に非ざるなり」と。乃ち寢ぬ。頃之くして、鏡を取りて歯を視れば、則ち尽く燋げて且つ黧し。左右に命じて鉄如意を取らしめ歯を撃ちて堕とし、帯に蔵す。乃ち懐中より神仙の薬を出せば、微かに紅く、堕歯の断に傅く。復た寐ぬること良や久しくして、歯は皆な出づ。粲然として潔白たり。玄宗　方に之れを信ず。

【大意】

玄宗が即位した当初、天下国家を治める道、そして神仙と仙薬の処方のことについて自ら探求し、変化には一定の規則がなく予測もできないということを聞くに及んで、それを疑った。邢和璞という者がいて、人を占ってその寿命や運命の善し悪しを知ることができた。玄宗は張果を占わせると、その年齢を明確に知ることはできなかった。次に師夜光という者がいて、霊視能力を持っていた。玄宗は、張果を呼び出し、師夜光が居ることを知らせずに同席させ、師夜光に張果を霊視させた。師夜光は玄宗の前に進み出て「張果は今いったいどこにおるのでございましょうか」と言った。師夜光は張果と面と向かっているのに最後まで彼の姿が見えなかったのである。玄宗は高力士に言った、「私は、トリカブトの煎汁を飲んで苦しむことがない者は、本当の超人であると聞いたことがある。」おりよく寒い日だったので、トリカブトの煎汁を張果に飲ませた。張果は、そこで煎汁を引き寄せて大盃で三杯飲み、機嫌良く酔っ払っているようであった。そして弟子達の方を振り返って言った、「うまい酒ではない。」そうして張果は横になって寝てしまった。しばらくして、目が覚めた張果が鏡を取って歯をよく見てみると、すべて焼け焦げて汚い黒色に変色していた。そこでまわりの弟子達に命じて鉄の如意を渡させ、歯を打ちつけて抜き、抜けた歯を帯の中にかくした。そしてふところから仙薬を取り出すと、それはほんのりした赤色で、張果はそれを歯の抜けたあとに塗った。もう一度長く眠ると、歯がすべてはえており、キラキラと真っ白であった。玄宗は、その時になってはじめて当初疑っていた変化には一定の規則がなく予測もできないということを信ずるようになった。

【注釈】

●玄宗初即位～：「初」とあるので、「疑之」までは即位した当初のことである。張果が玄宗のもとに招かたのは開元二一年であるから、即位当初、張果は玄宗のもとにはいない。『新唐書』張果列傳が、玄宗が張果に諮問したとするのと異なる。

●理道：ここでは『新唐書』張果列傳の「治道」と同じで、天下国家を治める道、治政の道理と解す。また唐の高宗・李治の諱を避け「理」とした唐代の文献の表記が継承されている可能性もある。

●方藥：（不老長寿の）薬の処方。

●訪：探求する。

●変化不測：変化には、一定の規則がなく、それを予測することはできない。『荘子』天運「孔子見老聃歸、三日不談。弟子問曰、夫子見老聃、亦將何規哉。」成玄英疏「老子方外大聖、變化無常、不可測量、故無所談説也。」
●邢和璞：『新唐書』巻五九・藝文志三・丙部子録・暦算類「邢和璞潁陽書三卷隱潁陽石堂山。」
●算：計算して断定する。占う。
●懵然：はっきりとしない。
●甲子：年齢。歳月。
●師夜光：未詳。『舊唐書』『新唐書』では張果列傳のみに見える。
●鬼：霊的存在。
●力士：高力士。六八四―七六二。宦官。玄宗皇帝の側近として権勢を誇った（『中国文学家大辞典　唐五代巻』）。
●菫：毒草。とりかぶと。『國語』巻八・晉語二「驪姬以君命申生曰、今夕君夢齊姜、必速祠而歸福。申生許諾、乃祭于曲沃、歸福于絳。公田、驪姬受福、乃賓鴆于酒、賓菫于肉。公至、召申生獻、公祭之地、地墳。申生恐而出。驪姬與犬肉、犬斃。飲小臣酒、亦斃。公命殺杜原款。申生奔新城。」韋昭注「菫、烏頭也。」
●奇士：徳行や才知が傑出した士人。
●卮：さかずき。大盃であったと考えられる。『大廣益會玉篇』巻十六・卮部二五三「卮。之移切。酒漿飲器也。可受四升。」卮は巵の俗字。
●醺然：酒に酔って機嫌がよい様子。
●寝：ベッドに入って寝る。この場面が玄宗の御前であるならば、そこにしつらえられていた長椅子に横になって寝たのであろう。
●左右：お付きの者。ここは張果の弟子達と考えた。
●如意：仏具のひとつ。蕨のように先の曲がったかたちの平らな棒。

【原文】

玄宗好神仙、而欲果尚公主。果固未知之、謂祕書少監王迥質、太常少卿蕭華曰、「諺云娶婦得公主、眞可畏也。」迥質與華相顧、未曉其言。卽有中使至、宣曰、「玉眞公主早歳好道、欲降先生。」果大笑、竟不奉詔。迥質等方悟向來之言。後懇辭歸山。因下制曰、「恆州張果先生、遊方外者也。跡先高尚、深入窈冥。是渾光塵、應召城闕。莫詳甲子之數、且謂羲皇上人。問以道樞、盡會宗極。今特行朝禮、爰畀寵命。可銀青光祿大夫、號曰通玄先生。」其年請入恆山、錫以衣服及雜綵等、便放歸山。乃入恆山、不知所之。玄宗爲造棲霞觀於隱所。在蒲吾縣。後改爲平山縣。

【書き下し文】

玄宗　神仙を好み、而して果をして公主を尚らしめんと欲す。果　固より未だ之れを知らざれども、秘書少監・王迥質、太常少卿・蕭華に謂いて曰く、「諺に云う、婦を娶りて公主を得るは、真に畏る可きなり」と。迥質と華と相い顧みて、未だ其の言を暁らず。即ち中使の至る有りて、宣いて曰く、「玉真公主早歳より道を好み、先生に降さんと欲す」と。果　大いに笑いて、竟に詔を奉ぜず。迥質等　方に向来の言を悟る。後に懇ろに辞わりて山に帰らんとす。因りて制を下して曰く、「恒州の張果先生は、方外に遊ぶ者なり。跡は高尚を先んじ、深く窈冥に入る。是れ光塵を渾ぜ、応に城闕に召くべし。甲子の数を詳らかにする莫く、且つ謂う　羲皇上の人かと。問うに道枢を以てすれば、尽く宗極を会す。今　特に朝礼を行ない、爰に寵命を畀う。銀青光禄大夫に可とし、号して通玄先生と曰う」と。其の年　恒山に入るを請い、錫うるに衣服及び雑綵等を以てし、便ち放たれて山に帰る。乃ち恒山に入り、之く所を知らず。玄宗　為に棲霞観を隠所に造る。蒲吾県に在り。後に改めて平山県と為す。

【大意】

玄宗は神仙を愛好し、張果を公主と結婚させたいと考えていた。張果はもちろん玄宗の目論見を知らなかったが、秘書少監の王迥質と太常少卿の蕭華に「諺にあるが、嫁を娶って、それが皇帝の娘なら、本当に畏れ多い」と言った。王迥質と蕭華は顔を見合わせ、張果の言葉に合点がいかない様子であった。するとすぐに宮中よりの使者がやって来て、皇帝のお言葉を伝えた、「玉真公主は幼い頃より、神仙の道を愛してやまず、先生に降嫁させようと思う。」張果は大笑いして、結局は詔を承けなかった。王迥質たちは、そのときはじめて先ほどの張果の言葉に合点がいったのだった。その後、張果は玄宗に懇切丁寧に公主との結婚を辞退し、恒州の山に帰ることを願い出た。張果の懇願をうけて玄宗は制を下して述べた、「恒州の張果先生は、俗世の外を自由に行く者である。その行ないは、天子に仕えることより高潔さを優先し、奥深い境地に達している。これこそ優れた風采を備えているということであり、都城に招聘して臣下としなければならない。その年齢は不詳であり、また聖天子・伏羲の時代の人

かと思しい。道のかなめについて尋ねると、ものごとの根源を余すところなく会得している。今　張果先生のためだけに朕への拝謁の礼を挙行し、ここに寵愛の意を以て命を与える。銀青光禄大夫に任じ、通玄先生の称号を下賜する。」その年、張果は恒山に入ることを願い出たところ、衣服と色とりどりの絹織物などを下賜され、そのまま都を去ることゆるされて山に帰った。そうして恒山に入ると、その行方はわからなくなった。玄宗は、張果のために棲霞観を隠棲の地に造営した。それは蒲吾県にある。蒲吾県は後に平山県と改められた。

【注釈】

●公主：皇帝の娘。

●秘書少監：王朝の典籍、文書、記録を管理する秘書省の次官。『大唐六典』巻十・祕書省「少監二人。從四品上。……祕書監之職、掌邦國經籍圖書之事。有二局、一曰著作、二曰太史、皆率其屬而修其職。少監爲之貳焉。」

●王迥質：開元中に楊瑒に推薦されて諫議大夫・皇太子侍読となりキャリアが始まったことが伝わる。『舊唐書』巻一八五下・良吏列傳下・楊瑒列傳「（開元）十六年、（楊瑒）遷國子祭酒、表薦滄州人王迥質、瀛州人尹子路、汴州人白履忠、皆經學優長、德行純茂、堪爲後生師範、請追授學官、令其教授、以奬儒學之路。及追至、迥質起家拜諫議大夫、仍爲皇太子侍讀。」

●太常少卿：王朝の礼楽、郊廟、社稷の管理をする太常寺の次官。『大唐六典』巻十四・太常寺「少卿二人。正四品上。……太常卿之職、掌邦國禮樂、郊廟、社稷之事。以八署分而理焉。……惣其官屬、行其政令。少卿爲之貳。」

●蕭華：?―七六四?。開元十六年から二一年まで宰相を務めた蕭嵩の子。開元年間に給事中、工部侍郎となる（周道済『漢唐宰相制度』、大化書店、一九七八年。『中国文学家大辞典　唐五代巻』）。

●中使：宮中から使者。皇帝が私的に派遣する。宦官がこれに当てられることが多い。

●玉真公主：玄宗の父である睿宗の娘（『新唐書』巻八三・諸帝公主列傳・睿宗十一女列傳）。王維「奉和聖製幸玉眞公主山莊因題石壁十韻之作應制」（『全唐詩』巻一二七）、儲光羲「玉眞公主山居」（巻一三九）、李白「玉眞仙人詞」（巻一六七）、「玉眞公主別館苦雨贈衛尉張卿二首」（巻一六八）、高適「玉眞公主歌」（巻二一四）などの作品が残る。開元・天宝時代には彼女の道観や別荘が詩人・士人達にとってサロン的な交游の役割を果たしていたと推測される。

●向来：さきほど。たった今。

●制：みことのり。唐の載和元年（六八九）に「詔」は「制」と改称されたが、それ以降も両者の混用が見られ、さらに「制」と「敕」との混用も見られる（中村『隋唐王言の研究』）。ここの制は、『全唐文』巻二三に玄宗「加張果封號制」「恆州張果先生、遊方之外者也。跡先高尚、深入窈冥。是混光塵、應召城闕。莫詳甲子之數、且謂羲皇上人。問以道樞、盡會宗極。今特行朝禮、爰畀寵命。可銀青光祿大夫、號曰通元先生。」と見える。

●方外：俗世の外。『莊子』大宗師「子桑戸、孟子反、子琴張三人相與友、……而子桑戸死、未葬。孔子聞之、使子貢往侍事焉。……孔子曰、彼遊方之外者也。而丘遊方之内者也。外内不相及、而丘使女往弔之、丘則陋矣。」成玄英疏「方、區域也。彼之二人、齊一死生、不爲教跡所拘。故遊心寰宇之外。而仲尼子貢、命世大儒、行裁非之義、服節文之禮、鋭意哀樂之中、遊心區域之内、所以爲異也。」

●跡：行動。

●高尚：高潔。『易經』蠱「上九。不事王侯、高尚其事。」、『晉書』巻九四・隱逸列傳・陶潛列傳「潛少懷高尚、博學善屬文、穎脱不羈、任眞自得、爲鄉鄰之所貴。」

●窈冥：奥深い様子。『老子』第二一章「道之爲物、唯恍唯惚。忽兮恍兮、其中有象。恍兮忽兮、其中有物。窈兮冥兮、其中有精。其精甚眞、其中有信。」

●光塵：すばらしい風采、人品。繁欽「與魏文帝牋」「冀事速訖、旋侍光塵、寓目階庭、與聽斯調。」張銑注「光塵、美言之。與、及也。斯調、喉囀也。」（『六臣註文選』巻四十）。また玄宗「賜李含光物及香棗等敕」「敬問元靜先生。先生稟潔白之節、得黄中通理。學徧九流、逾守元默。心遊八景、益混光塵。則密行高節、良可歎矣。」（『全唐文』巻三六）とある。また、ひかりとちり。『老子』第四章「道沖而用之或不盈。淵兮似萬物之宗。挫其鋭、解其紛。和其光、同其塵。湛兮似或存。吾不知誰之子、象帝之先。」

●城闕：皇帝の居所。宮城。都。

●羲皇上人：伏羲の時代の人。羲皇は、神話時代の聖天子である伏羲。陶淵明「與子儼等書」「少學琴書、偶愛閑靜。開卷有得、便欣然忘食。見樹木交蔭、時鳥變聲、亦復歡然有喜。常言五六月中、北窗下臥。遇涼風暫至、自謂是羲皇上人。」（『陶淵明集』巻七）。

●道枢：道のかなめ。『荘子』齊物論「是以聖人不由、而照之於天、亦因是也。是亦彼也、彼亦是也。彼亦一是非、此亦一是非。果且有彼是乎哉。果且無彼是乎哉。彼是莫得其偶、謂之道樞。樞始得其環中、以應無窮。是亦一無窮、非亦一無窮也。故曰莫若以明。」郭象注「偶、對也。彼是相對、而聖人兩順之。故無心者與物冥、而未嘗有對於天下也。樞、要也。此居其樞要而會其玄極、以應夫無方也。」

●宗極：ものごとの根源。沈約「神不滅論」「窮其原本、盡其宗極、互相推仰、應有所窮。」（嚴可均『全上古三代晉漢三國六朝文』『全梁文』巻二九。以下、『文選』『藝文類聚』など特に示した場合以外の唐前文の引用はこれによる）。また「道枢」の注を参照。

●寵命：皇帝による特別の任命。

●畀：賜与する。

●銀青光禄大夫：従三品の文散官。

●可：任命する。

●恒山：五岳のひとつ。北岳。定州（治・安喜県、河北省定州市）の北部。

●雑綵：様々な色の絹織物。

●蒲吾県：恒州の房山県（河北省張家口市北）。『元和郡縣圖志』巻一七・河北道二・恆州「房山縣、中。東至州八十里。本漢蒲吾縣地、屬常山郡。隋開皇十六年置房山縣、因縣北房山爲名、屬井州。大業二年廢井州、縣屬恆州。武德四年又屬井州、貞觀十七年又屬恆州。其城内實外險、一名嘉陽城。」

●平山県：『舊唐書』巻三九・地理志二・河北道・鎮州・平山「漢蒲吾縣、屬常山郡。隋改爲房山縣。義寧元年、置房山郡。武德元年、置嶽州、領房山一縣。四年、廢嶽州、房山屬恆州。至德元年、改爲平山縣、仍以恆州爲平山郡。」

（二）『新唐書』巻二〇四・方技列傳・張果列傳

【底本】

●中華書局点校本、一九七五年

【原文】

張果者、晦鄉里世繫、以自神隱中條山。往來汾、晉閒、世傳數百歲人。武后時、遣使召之、卽死。後人復見居恆州山中。

【書き下し文】

張果は、郷里・世系を晦まし、以て自ら中条山に神隠す。汾・晋の間に往来し、世に數百歳の人と伝う。武后の時、使いを遣りて之れを召さんとすれば、即ち死す。後の人　復た恒州の山中に居るに見う。

【大意】

張果は、その郷里や家系を隠し、自分から中条山に神仙として隠棲していた。汾・晋の地域で暮らし、世間では数百歳の人であると伝えていた。則天武后の時に、張果を召しかえようと使者を派遣したとたんに死んでしまった。後の時代の人がふたたび恒州の山中に暮らしている張果に会った。

【注釈】

●神隠：神のように隠れる。『劉氏新論』巻三・法術「故天以氣爲靈、主以術爲神、術以神隱成妙、法以明斷爲工。」

【原文】

開元二十一年、刺史韋濟以聞。玄宗令通事舍人裴晤往迎、見晤輒氣絶仆、久乃蘇。晤不敢逼、馳白狀。帝更遣中書舍人徐嶠齎璽書邀禮、乃至東都。舍集賢院、肩輿入宮。帝親問治道神仙事、語祕不傳。果善息氣、能纍日不食、數御美酒。嘗云、「我生堯丙子歲、位侍中。」其貌實年六七十。時有邢和璞者、善知人夭壽。師夜光者、善視鬼。帝令和璞推果生死、懵然莫知其端。帝召果密坐、使夜光視之、不見果所在。

【書き下し文】

開元二十一年、刺史韋済　以て聞ゆ。玄宗　通事舍人・裴晤をして往きて迎えしむれば、晤に見えば輒ち気　絶えて仆れ、久しくして乃ち蘇る。晤　敢えて逼らず、馳せて状を白す。帝　更に中書舍人・徐嶠を遣りて璽書を齎し礼を邀むれば、乃ち東都に至る。集賢院に舍り、肩輿にして宮に入る。帝　親から治道・神仙の事を問う。語は秘して伝えず。果は息気を善くし、能く累日食らわずして、数しば美酒に御る。嘗て云う、「我は堯の丙子の歳に生まれ、侍中に位す」と。其の貌は実に年六七十なり。時に邢和璞なる者有りて、善く人の夭寿を知る。師夜光なる者は、善く鬼を視る。帝　和璞をして果の生死を推さしむれば、懵然として其の端を知る莫し。帝　果を召きて密かに坐せしめ、夜光をして之れを視しむれば、果の所在を見ず。

【大意】

開元二十一年（七三三）、（恒州）知事の韋済が張果のことを皇帝にご報告申し

上げた。玄宗は、通事舍人・裴晤を張果のもとに行かせて迎え入れようとしたが、張果は裴晤にあうとすぐに息が途絶えて倒れ伏し、ずいぶん時間が経ってようやく息を吹き返した。裴晤は執拗に迫ることはせず、急ぎ都に戻って状況を皇帝にご説明申し上げた。玄宗は、かさねて中書舍人・徐嶠を派遣し、御璽で封じた詔を持参させて、臣下の礼を求めると、ようやく東都・洛陽にやって来た。張果は集賢院に泊まり、輿に乗るという待遇で天子の宮殿に入った。玄宗は自分自身で直接張果に天下国家を治める道と神仙のことについて下問した。その時の対話は秘匿されて伝わっていない。張果は養生のための呼吸法に長けており、何日も食事をとらないで、たびたび皇帝の超高級酒が振る舞われるパーティにご相伴することができた。張果は「私は堯帝の丙子の歳の生まれで、堯帝の宰相を務めていた」と言ったことがある。その容貌はというと実際に年齢六、七十であった。当時、邢和璞という者がいて、人の寿命を知ることができた。師夜光という者には霊視能力があった。玄宗は、邢和璞に張果の生死を推定させると、はっきりとせずその手がかりさえつかめなかった。玄宗は、張果を呼び寄せ、師夜光の霊視能力については告げずに同席させ、師夜光に霊視させると、彼には張果がそこにいることが見えなかった。

【注釈】

●集賢院：集賢殿書院。玄宗が開元十三年に置いた。天下古今の図書の蒐集と整理・校訂をつかさどる。また皇帝の命を承けて天下の遺賢を招聘する。『大唐六典』巻九・集賢殿書院「開元十三年所置。……集賢院學士掌刊緝古今之經籍、以辨明邦國之大典、而備顧問應對。凡天下圖書之遺逸、賢才之隱滯、則承旨而徵求焉。其有籌策之可施於時、著述之可行於代者、較其才藝、考其學術、而申表之。凡承旨撰集文章、校理經籍、月終則進課于内、歳終則考最于外。」

●治道：天下国家を治める道、治政の道理。『舊唐書』張果列傳の「理道」の注釈を参照。

●息気：ここでは「道教の養生法の一種」である呼吸法と解す。「新鮮な気を吸い、古い気を吐き出すことによって健康の増進と長生をめざすもの」（『道教事典』「呼吸法」、原田二郎執筆）。

●堯：伝説時代の皇帝。

●侍中：皇帝の側近。唐代では宰相。

【原文】

帝謂高力士曰、「吾聞飲菫無苦者、奇士也。」時天寒、因取以飲果、三進、頽然曰、「非佳酒也。」乃寢。頃視齒燋縮、顧左右取鐵如意擊墮之、藏帶中、更出藥傅其斷。良久、齒已生、粲然駢絜。帝益神之。

【書き下し文】

帝　高力士に謂いて曰く、「吾聞く　菫を飲みて苦しむ無き者は、奇士なり」と。時に天寒く、因りて取りて以て果に飲ましめ、三たび進むるに、頽然として曰く、「佳酒に非ざるなり」と。乃ち寢ぬ。頃くして齒を視れば燋げ縮む。左右を顧みて鉄如意を取りて之れを擊ちて墮とし、帶中に藏し、更に藥を出して其の斷に傅く。良や久しくして、齒は已に生え、粲然として駢絜なり。帝益ます之れを神とす。

【大意】

玄宗は高力士に言った、「私は、トリカブトの煎汁を飲んで苦しむことがない者は、超人であると、聞いたことがある。」その時は寒い日だったので、トリカブトの煎汁を取り寄せて張果に飲ませ、三度進めたが、張果は酔い崩れて「うまい酒ではない」と言った。そうして張果はベッドに横になって寝てしまった。しばらくして、歯をよく見ると、焦げて縮んでいた。そこでまわりの弟子達の方を振り返って鉄の如意を取り、歯を打ちつけて抜き落とし、抜けた歯を帯の中にかくし、さらに薬を取り出して抜けたあとに塗った。かなり時間が経つと、歯はすでにキラキラと白く生えそろっていた。玄宗はますます張果を神仙だと考えるようになった。

【注釈】

●菫：『舊唐書』と同じく「菫汁」であろう。

●顧左右：意地悪な見方をすれば、張果が弟子達に、これから行なう妖術の仕込みのための合図、目配せをしたのかもしれない。

【原文】

欲以玉眞公主降果、未言也。果忽謂祕書少監王迥質、太常少卿蕭華曰、「諺謂娶婦得公主、平地生公府、可畏也。」二人怪語不倫。俄有使至、傳詔曰、「玉眞公主欲降先生。」果笑、固不奉詔。有詔圖形集賢院、懇辭還山、詔可。擢銀青光祿大夫、號通玄先生、賜帛三百匹、給扶侍二人。至恆山蒲吾縣、未幾卒、或言尸解。帝爲立棲霞觀其所。

【書き下し文】

玉真公主を以て果に降さんと欲して、未だ言わざるなり。果　忽ち　秘書少監・王迥質、太常少卿・蕭華に謂いて曰く、「諺に謂えらく　婦を娶りて公主を得るは、平地に公府生まれ、畏るべきなり」と。二人　語の不倫なるを怪しむ。俄にして使いの至る有りて、詔を伝えて曰く、「玉真公主　先生に降さんと欲す」と。果　笑い、固より詔を奉ぜず。詔有りて形を集賢院に図かんとすれども、懇ろに辞わりて山に還らんとし、詔して可す。銀青光禄大夫に擢でられ、通玄先生と号せらる。帛三百匹を賜わり、扶侍二人を給わる。恒山の蒲吾県に至り、未だ幾ばくならずして卒す。或いは尸解すと言う。帝　為めに棲霞観を其の所に立つ。

【大意】

玄宗は玉真公主を張果に嫁がせたいと考えていたが、まだ口にはしていなかった。張果はふと、秘書少監の王迥質と太常少卿の蕭華に言った、「諺にあるが、嫁を娶って、それが皇帝の娘ならば、普通の土地に役所ができてしまい、畏れ多い。」王迥質と蕭華の二人は張果の言葉に思い当たることふしがないことを訝かしんだ。すると間もなく使者がやって来て、「玉真公主を張果先生に降嫁させたい」との詔を伝えた。張果は笑って、詔を固辞した。詔を下して張果の姿を集賢院に描かせようとしたが、張果は丁寧に辞退して山に戻ることを願い出ると、詔によって許可された。張果は、銀青光禄大夫に抜擢され、通玄先生との称号を授かった。布帛三百匹を下賜され、付き人二人を与えられた。張果は、恒山の蒲吾県にやって来ると、ほどなくして亡くなった。尸解したのだとも言われる。帝は、張果のために棲霞観を彼が亡くなった場所に建立した。

【注釈】

●平地：平穏な土地。

●公府：官庁、役所。

●不倫：ここは、張果の語に対応すること、相当することがない、と解す。

●圖形集賢院：漢の宣帝が十一人の功臣の肖像を麒麟閣に描かせて讃えたという故事がある。皇帝が宮殿に臣下の像を描かせることは、顕彰の方法の一つである。『漢書』巻五四・李廣蘇建傳「甘露三年、單于始入朝。上思股肱之美、乃圖畫其人於麒麟閣。法其形貌、署其官爵姓名。唯霍光不名、曰大司馬大將軍博陸侯姓霍氏、次曰衛將軍富平侯張安世、……次曰典屬國蘇武。皆有功德、知名當世、是以表而揚之、明著中興輔佐、列於方叔、召虎、仲山甫焉。凡十一人、皆有傳。」

●匹：一匹＝四丈。唐代の一丈は三・一一メートル、「三百匹」だと三七三二メートル、約四キロメートルになる。すさまじい量である。

●扶侍：そばにいて世話をする者。張果には、親族、弟子、奴僕がいたであろうが、ここは皇帝から世話係を賜わったことが栄誉なのである。

●尸解：「不死・再生を獲ると信じられた方式の一つ。蟬や蛇がその皮を蛻として捨て残し、新しい肉身は生きるという生物現象の誤解した類推から、人間もかくあるべしとの期待・願望は道教以前からあった。」（『道教事典』「尸解」、宮川尚志執筆）。また荒俣宏『帝都物語　不死鳥篇』（角川文庫、一九八七年）では、ジョセフ・ニーダムが主人公・加藤保憲の尸解を目のあたりにするシーンが描かれている。

（三）『全唐文』巻九二三・張果・小傳

【底本】

●中華書局影印本、一九八三年

【原文】

果、不知何許人。武后時隱中條山、往來汾晉間。自云、「年數百歲。」武后遣使召之、佯死不赴。開元二十一年、恆州刺史常濟以同遣使齎璽書邀迎之、至東都。元宗好神仙、欲以玉眞公主降之。果不奉詔、懇辭歸山。乃賜號通元先生、銀青光祿大夫。爲造棲霞觀於隱所。入恒山、不知所之。

【書き下し文】

果は何許の人なるかを知らず。武后の時、中条山に隠れ、汾・晋の間に往来す。自ら云う、「年は數百歳なり」と。武后　使いを遣りて之れを召さんとすれども、死を佯りて赴かず。開元二十一年、恒州刺史・常済　遣使と同に璽書を齎すを以て之れを邀迎すれば、東都に至る。元宗　神仙を好み、玉真公主を以て之れに降さんと欲す。果　詔を奉ぜず、懇に辞りて山に帰らんとす。乃ち号を通元先生と賜い、銀青光禄大夫とす。為に棲霞観を隠所に造る。恒山に入り、之く所を知らず。

【大意】

張果は、どこの人であるかはわからない。則天武后の時に、中条山に隠棲し、

汾・晋の地域で活動していた。自ら「数百歳である」と称していた。則天武后は、使者を派遣して張果を召しかかえようとしたが、張果は死をいつわり、武后のもとに向かわなかった。開元二十一年（七三三）、恒州刺史・常済（韋済）が、皇帝の使者を引き連れて御璽で封じた詔を持参することで、張果を招き入れようとしたら、張果は東都・洛陽にやって来た。玄宗は神仙を愛好し、玉真公主を張果に降嫁させようとした。張果は詔に従わず、丁寧に辞退して山に帰ることを願い出た。そこで玄宗は通元先生という称号を下賜し、銀青光禄大夫とした。そして張果のために棲霞観を彼の隠棲の地に造営した。張果は恒山に入ると、行方がわからなくなった。

【注釈】

●常済：韋済の誤り。

●遣使：派遣された使者。

●元宗：玄宗。『全唐文』が編纂された清朝の聖祖・愛親覚羅玄燁の諱を避けた。「通元先生」も同様。

※李徳輝『全唐文作者小伝正補』（遼海出版社、二〇一一年）に、この小伝の補正がある。

（四）『全唐詩』巻八六〇・張果・小傳

【底本】

●『全唐詩』中華書局、一九六〇年

【原文】

張果、兩當人。先隱中條山、後於鸞鶯山登眞洞往來。天后召之不起。明皇以禮致之。肩輿入宮。擢銀青光祿大夫、賜號通玄先生。未幾還山。

【書き下し文】

張果は両当の人なり。先に中條山に隠れ、後に鸞鶯山の登真洞に往来す。天后　之れを召せども起たず。明皇　礼を以て之れを致す。肩輿にして宮に入る。銀青光禄大夫に擢でられ、号を通玄先生と賜わる。未だ幾ばくならずして山に還る。

【大意】

張果は両当の人である。はじめ中条山に隠棲し、のちに鸞鶯山の登真洞で暮らしていた。則天武后が張果を招聘しようとしたが、応じなかった。玄宗皇帝が礼を尽くして張果を招聘することに成功した。張果は輿に乗るという待遇で宮中に入った。銀青光禄大夫に抜擢されて、通玄先生という号を授かった。玄宗のもとに来ていくらも経たないうちに帰山した。

【注釈】

●両当：鳳州の治所。現在の甘粛省両当県の東。

●鸞鶯山：鳳州両当県の西の山。「鸞鶯」は、伝説上の神鳥で鳳凰の一種という。「鸞鶯山」は、「百度百科」（https://baike.baidu.com/item/鸞鶯山、二〇一九一〇一七最終アクセス）によれば、甘粛省隴南市両当県にある山で、張果の昇仙の地となっている。『元和郡縣圖志』巻二二・山南道三・鳳州「（西魏）廢帝三年改南岐州爲鳳州。因州境有鸞鶯山爲名。……兩當縣、……鸞鶯山在縣西二十里。」。また、張果「題登眞洞」詩の「登真洞」の注を参照（本訳注稿・下篇に掲載予定）。

●登真洞：張果「題登眞洞」詩の注を参照。

（五）『新唐書』巻五九・藝文志三・丙部子録・道家類・神仙

張果陰符經太無傳一卷
又陰符經辨命論一卷
氣訣一卷
神仙得道靈藥經一卷
罔象成名圖一卷
丹砂訣一卷開元二十二年上。

【注釈】

●開元二十二年上：上記の伝記資料に、張果が玄宗の招きに応じて洛陽に来たのが、「開元二十一年」とあることに符合する。

（六）『宋史』藝文志

【底本】

●中華書局点校本、一九八五年

『宋史』巻二〇一・藝文志一・経類・易類

張果周易罔象成名圖一卷

『宋史』巻二〇五・藝文志四・子類・道家類

張果陰符經注一卷
又陰符經辨命論一卷
『宋史』卷二〇七・藝文志六・子類・醫書類
張果傷寒論一卷

二、『太平廣記』「張果」、『宣室志』卷八所収エピソード

本節では、『太平廣記』「張果」と『宣室志』卷八所収のエピソードの訳注を掲げる。これらは伝奇小説であり、その内容には、いわゆる虚構的な要素が加味されていると考えられる。しかし一方で、唐代に著されたこれらのエピソードは、張果と同じ朝代において、張果像がどのようなものであったを伝えるものであり、仙人としての張果像の原型、その意味での「実像」を伝える資料と考えられる。

（七）『太平廣記』卷三十・神仙三十「張果」

【底本】

●張國風會校『太平廣記會校』、北京燕山出版社、二〇一一年

【原文】

張果者、隱於恆州條山、常往來汾晉間。時人傳有長年祕術。耆老云、「爲兒童時見之、自言數百歲矣。」唐太宗、高宗、曇徵之不起。則天召之出山、佯死於妬女廟前。時方盛熱、須臾臭爛生蟲。聞於則天、信其死矣。後有人於恆州山中復見之。果常乘一白驢、日行數萬里。休則重疊之、其厚如紙、置於巾箱中。乘則以水噀之、還成驢矣。

【書き下し文】

張果は、恒州の条山に隠れ、常に汾・晋の間に往来す。時人　長年の秘術有りと伝う。耆老云う、「児童為りし時に之れに見い、自ら言う数百歳なり」と。唐の太宗、高宗　累りに之れを徵せども起たず。則天　之れを召して山を出さんとすれども、死を妬女廟の前に佯る。時　方に盛熱にして、須臾にして臭爛して虫を生ず。則天に聞こえ、其の死を信ず。後に人の恒州の山中に復た之れに見う有り。果　常に一白驢に乗り、日に行くこと数万里。休めば則ち之れを重畳すれば、其の厚きこと紙の如く、巾箱中に置く。乗れば則ち水を以て之れに噀かば、還た驢と成る。

【大意】

張果は、恒州の条山に隠棲し、普段は汾・晋の地域で活動していた。当時の人々は、張果は寿命を延ばす秘術を有していると言い伝えていた。古老は、「子供の頃に張果に会ったが、自ら数百歳だと称していた。」と言っていた。唐の太宗と高宗はつづけて張果を召し出そうとしたが応じなかった。則天武后は、張果を召し出して条山から出そうとしたけれども、妬女廟の前で死んだふりをした。その時期はちょうど猛暑で、張果の遺体はいくらも経たないうちに腐爛して臭気を発し、虫がわいた。臣下が、則天武后にそのことをご報告申し上げると、武后は張果の死を信じた。その後また、恒州の山中で張果に会った人がいた。張果はいつも一頭の白い驢馬に乗り、一日に数万里も旅をしていた。休むときはその驢馬を幾重にも折りたたむと、紙のように薄くなり、小箱の中に入れていた。乗るときは、水を口に含んでそれに吹きかけると、再び驢馬にもどった。

【注釈】

※『舊唐書』『新唐書』の張果列傳、『全唐文』『全唐詩』の小傳に示した注は、原則として省略する。

※本エピソードは、ほぼ同じものが、唐・鄭處誨撰『明皇雜錄』に見える。ここでは『太平廣記』を底本とする。

●条山：『舊唐書』『新唐書』張果列傳では「中條山」となっている。「中條山」の誤り、「中」の脱字と考えられる。

●耆老：老人。

●徵：君主が召し出す。

●妬女廟：『太平廣記』卷二九一・神一に「妬女廟」「幷州石艾、壽陽二界、有妬女泉、有神廟。泉瀵水深沈、潔澈千丈。……出朝野僉載」の記事がある。幷州は、恒州の西隣の太原府（治、太原県・晋陽県。山西省太原市）。石艾県（山西省平定県）、寿陽県（同寿陽県）は太原府の東部に位置し、従って恒州に近い。

●盛熱：盛んな熱。『藝文類聚』卷五・歲時下・熱「魏繁欽暑賦曰、暑景方徂、時惟六月。大火飄光、炎氣酷烈。翕翕盛熱、蒸我層軒。」

●須臾：少しの時間。

●臭爛：腐爛して臭気を発する。

●白驢：白い驢馬。『冊府元龜』卷八一〇・總錄部・隱逸第二「樓惠、東陽人。有道術、居金華山。禽獸毒螫者、皆避之。宋明帝聞之、敕出、住華林園、除

奉朝。請固乞不受。求東歸、忽乗白驢向臨安縣。衆不知所以尋。」

●里：唐代の一里は、約五六〇メートル。

●重疊：重なりあわす。

●巾箱：頭巾を入れる小さな箱。のちに書巻や文書を入れるようになった。

●噀：水などを口に含んで吹く、吐く。

【原文】

開元二十三年、玄宗遣通事舍人裴晤馳驛於恆州迎之。果對晤、氣絶而死。晤乃焚香啓請、宣天子求道之意。俄頃漸蘇。晤不敢逼、馳還奏之。乃命中書舍人徐嶠齎璽書迎之。果隨嶠到東都、於集賢院安置、肩輿入宮、備加禮敬。

【書き下し文】

開元二十三年、玄宗　通事舍人・裴晤を遣りて駅を恒州に馳せて之れを迎えしむ。果　晤に対し、気絶えて死す。晤　乃ち香を焚きて啓請し、天子求道の意を宣う。俄頃にして漸く蘇る。晤　敢えて逼らず、馳せ還りて之れを奏す。乃ち中書舎人・徐嶠に命じて璽書を齎して之れを迎えしむ。果　嶠に随いて東都に到り、集賢院に安置せられ、肩輿にして宮に入り、備に礼敬を加えらる。

【大意】

開元二十三年（七三五）、玄宗は通事舍人・裴晤を派遣し、恒州まで早馬を乗り継がせ、張果を迎えようとした。張果は裴晤を面前にすると、息が途絶えて死んでしまった。裴晤はそこでお香を焚いて神仏の名を唱えて祈り、天子が道をお求めになっているというご意志を伝えた。しばらくすると張果は徐々に息を吹き返した。裴晤は執拗に迫ることはせず、急いで都に帰り、顛末を皇帝にご報告した。そこで玄宗は中書舎人・徐嶠に命じて、御璽で封じた詔を持参させて、張果を招き入れようとした。張果は徐嶠について東都・洛陽にやって来て、集賢院にいったん留め置かれ、輿に乗るという待遇で宮中に入り、さまざまな儀礼により敬意を払われ迎えられた。

【注釈】

●馳駅：駅で乗り継ぎながら、早馬を疾走させる。

●啓請：願い請う。『岩波仏教辞典第二版』（岩波書店、二〇〇二年）に「経文を読む前に仏・菩薩を招き請うこと。……たとえば，楞厳経の際には，楞厳会の仏・菩薩の名号をまず唱えることなどをいう。」とある。ここはひとまず、神仏の名を唱えて願うと訳す。

●宣：君命を伝える。

●俄頃：しばらく。やがて。

●漸：だんだん。しだいに。

●安置：落ち着かせる。

●備：みな。ことごとく。

●礼敬：儀礼にかなった作法により尊敬を表す。

【原文】

玄宗因從容謂曰、「先生得道者也、何齒髮之衰耶。」果曰、「衰朽之歲、無道術可憑、故使之然。良足恥也。今若盡除、不猶愈乎。」因於御前拔去鬢髮、擊落牙齒、流血溢口。玄宗甚驚、謂曰、「先生休舍。少選晤語。」俄頃召之、青鬢皓齒、愈於壯年。

【書き下し文】

玄宗　從容たるに因りて謂いて曰く、「先生は道を得る者なれど、何ぞ歯髪の衰えたるか」と。果　曰く、「衰朽の歳は、道術の憑む可き無く、故に之れをして然らしむ。良に恥ずるに足るなり。今　若し尽く除けば、猶お愈らざるか」と。因りて御前に於いて鬢髪を抜き去り、牙歯を撃ち落とし、流血は口に溢る。玄宗　甚だ驚き、謂いて曰く、「先生　休舍せよ。少選くして晤語せん」と。俄頃にして之れを召せば、青鬢　皓歯、壮年より愈る。

【大意】

玄宗はのんびりくつろいですることもなかったので、張果に「先生は道を体得されたにもかかわらず、どうして歯や髪が衰えておられるのか。」と尋ねた。張果は「老いぼれの年齢は、仙術も頼みとすることができず、それでこのような有様なのでございます。本当にお恥ずかしい限りでございます。今　歯や髪をすべて抜き去ってしまうほうが、まだましではないでしょうか。」とお答えした。そこで陛下の御前で髪の毛を抜き去り、歯を打って落として、口は流血に染まった。玄宗はびっくり仰天してしまい言った、「先生、お休みになられよ。しばらくしてからお話の続きを。」やがて玄宗が張果を召し出すと、黒々とした髪、真っ白な歯が生えており、それは壮年の男盛り以上のものであった。

【注釈】

●従容：のんびりとくつろぐ。

●衰朽：衰えて役に立たなくなる。おいぼれる。

●道術：仙人や方士が行う術。仙術。
●憑：たよる。頼みとする。
●良：ほんとうに。
●愈：まさっている。ましである。『漢書』巻三六・楚元王傳「夫禮失求之於野、古文不猶愈於野乎。」顔師古注「愈、勝也。」
●鬢髪：頭の左右両側の髪の毛。
●休舎：休む。
●少選：わずか。しばらくの時間。
●晤語：向かい合って語る。
●壮年：三十歳前後のおとこざかり。

【原文】

一日、祕書監王迥質、太常少卿蕭華嘗同造焉。時玄宗欲令尚主、果未之知也。忽笑謂二人曰、「娶婦得公主、甚可畏也。」迥質與華相顧、未論其言。俄頃有中使至、謂果曰、「上以玉眞公主早歳好道、欲降於先生。」果大笑、竟不承詔。二人方悟向來之言。

【書き下し文】

一日、秘書監・王迥質、太常少卿・蕭華　嘗みに同に造る。時に玄宗　主を尚らしめんと欲すれども、果　未だ之れを知らざるなり。忽ち笑いて二人に謂いて曰く、「婦を娶りて公主を得るは、甚だ畏る可きなり」と。迥質と華と相い顧みて、未だ其の言を論らず。俄頃にして中使の至る有りて、果に謂いて曰く、「上　玉真公主の早歳より道を好むを以て、先生に降さんと欲す」と。果　大いに笑い、竟に詔を承けず。二人　方に向来の言を悟る。

【大意】

ある日、秘書監の王迥質、太常少卿の蕭華がためしに一緒に張果のもとにやってきた。その時、玄宗は公主を張果に娶らせたいと考えていたが、張果はまだそのことを知らなかった。すると突然張果は笑って二人に言った、「嫁を娶って、それが皇帝の娘なら、本当に畏れ多い。」王迥質と蕭華は顔を見合わせ、張果の言葉に合点がいかない様子であった。そうこうしないうちに宮中から使者がやってきて、張果に言った、「陛下は、玉真公主様が幼き頃より神仙の道を愛してやまれず、先生に降嫁させようとの思し召しである。」張果は大笑いして、結局は詔を承けなかった。王迥質と蕭華の二人は、そのときはじめて先ほどの張果の言葉に合点がいったのだった。

【注釈】

●嘗：試みに、と解す。
●造：到る。
●主：公主の簡称。

【原文】

是時公卿多往候謁、或問以方外之事、皆詭對之。毎云、「余是堯時丙子年人。」時莫能測也。又云、「堯時爲侍中。」善於胎息、纍日不食、食時但進美酒及三黄丸。玄宗留之内殿、賜之酒。辭以山臣飲不過二升。有一弟子、飲可一斗。玄宗聞之喜、令召之。俄一小道士、自殿簷飛下。年可十六七、美姿容、旨趣雅淡。謁見上、言詞清爽、禮貌臻備。玄宗命坐。果曰、「弟子當侍立於側、未宜賜坐。」玄宗目之愈喜、遂賜之酒。飲及一斗不醉。果辭曰、「不可更賜。過度必有所失。致龍顔一笑耳。」玄宗又逼賜之、酒忽從頂湧出、冠子落地、化爲一榼蓋。玄宗及嬪御皆驚笑、視之、已失道士矣。但見一金榼在地、覆之。榼盛一斗。驗之、乃集賢院中榼也。纍試仙術、不可窮紀。

【書き下し文】

是の時　公卿　多く往きて候謁し、或いは問うに方外の事を以てすれば、皆な詭りて之れに答う。毎に云う、「余は是れ堯の時の丙子の年の人なり」と。時に能く測る莫きなり。又た云う、「堯の時　侍中為たり」と。胎息に善く、累日　食わず、食う時は但だ美酒及び三つの黄丸を進むるのみ。玄宗　之れを内殿に留め、之れに酒を賜う。辞するに山臣は飲むこと二升を過ぎざるを以てす。一弟子有りて、飲むこと一斗可りなり。玄宗　之れを聞きて喜び、之れを召さしむ。俄にして一小道士、殿簷自り飛び下る。年は十六七可り、姿容美しく、旨趣　雅淡なり。上に謁見し、言詞　清爽、礼貌　臻備す。玄宗　坐するを命ず。果　曰く、「弟子は当に側に侍立すべく、未だ宜しく坐を賜わるべからず」と。玄宗　之れに目して愈いよ喜び、遂に之れに酒を賜う。飲むこと一斗に及べども酔わず。果　辞して曰く、「更に賜う可からず。度を過ぎば必ず失う所有り。龍顔の一笑を致すのみ」と。玄宗　又た逼りて之れに賜えば、酒　忽ち頂従り湧き出で、冠子　地に落ち、化して一榼蓋と為る。玄宗及び嬪御　皆驚き笑い、之れを視れば、已に道士失す。但だ見る　一金榼の地に在りて、之れを覆うを。榼は一斗を盛る。之れを験せば、乃ち集賢院中の榼なり。累りに

仙術を試み、紀すを窮む可からず。

【大意】

このとき、高位高官が多く張果のもとを訪れ、謁見待ちの状態であった。ある者が俗世の外側のことを尋ねると、すべて通常のこととは異なる卓越した答えを返した。いつも「私は堯帝の時代の丙子の生まれの人である」と言っていた。ただそのとき、その年数を計算することができる者はいなかった。また「私は堯帝の時代の宰相であった」と言っていた。胎児のような呼吸法を会得していて、何日間も食事をせず、食事をするときは高級酒とともに黄丸を三つ飲んでいた。玄宗は張果を宮殿の奥の間に留めおき、酒を賜った。張果は、山臣は酒は二升までにいたしておりますとお断りをした。一斗ほど酒を飲むことができる弟子が一人いるということで、玄宗はそれを聞くと喜び、その弟子を宮中に参らせるよう命じた。するとたちまち一人のちび道士が、宮殿の軒下から飛び降りた。歳の頃は十六、七で、みめうるわしく、物静かで上品な風格であった。その道士は陛下にお目通りしたが、言葉遣いには気品があり、礼儀作法は完璧であった。玄宗はその道士に坐るよう命じた。張果はそれを断って「弟子は師匠の傍らに控えなければならず、座席を賜ることは分不相応です」と言った。玄宗は、この様子を見て、ますます嬉しくなり、そして道士に酒を賜った。道士は一斗を飲みほしたが酔わなかった。張果は「これ以上、酒を賜らないように。度を越しますと必ずや過ちがおこります。ご尊顔のひと笑いで十分でございます」と断った。しかし玄宗がさらに執拗に酒を飲ませると、突然酒が道士の頭のてっぺんから湧き出して、冠が地面に落ち、冠は酒樽のふたに変わってしまった。玄宗と女官たちはみな驚いてまた笑い、そのふたをよくよく見ると、道士はもはやいなくなっていた。ただ一つの金の酒樽があり、ふたはそれにかぶさっていた。酒樽は一斗樽であった。調べてみると、その酒樽は集賢院のものであった。玄宗は張果に何度も仙術を披露させたが、その全てを記録することができないほど多種多様であった。

【注釈】

●公卿：公と卿。高位高官。

●候謁：謁見するのを待つ。『舊唐書』巻一五九・韋處厚列傳「久次當進及受代閑居者、常數十人、趨中書及宰相私第、摩肩候謁、繁於辭語。」

●詭：異なる。「方外の事」に関する一般の解釈とは違う卓越した答えをしたということであろうか。『漢書』巻七七・劉輔傳「竊見諫大夫劉輔、前以縣令求見、擢爲諫大夫、此其言必有卓詭切至、當聖心者、故得拔至於此。」顔師古注「卓、高遠也。詭、異於衆也。」あるいは、あざむく、だますの意味で、真義や奥義は伝えず、適当なことを述べてあしらっていたということか。

●測：ここは、堯の丙子の歳からの年数を計算するという意味と考える。

●胎息：「胎児のような呼吸法。鼻や口を使って外気を呼吸するのでなく、赤子が母親の胎内にいる時のようなかすかな気の摂取を行い、呼気は多く吸気は少なくして、元気を体内に蓄積していくとされる。」（『道教事典』「胎息」、原田二郎執筆）

●黄丸：薬の名称。嵇康「難張遼叔宅無吉凶攝生論」「又云、多食不消、必須黄丸。苟命自當生、多食何畏、而服良藥。」（『全三國文』巻五〇）。『初學記』巻五・地理上・泰山第三「崔文子。劉向列仙傳……又曰、崔文子、泰山山人。好黄老術、潛居山下。作黄丸賣藥。有疫氣者、飲藥卽愈。」

●進：飲む。食べる。

●内殿：奥向きの御殿。皇帝のプライベート空間の御殿と考えられる。

●山臣：隠士の皇帝に対する自称。

●升：唐代の一升は、約〇・六リットル。

●斗：一斗は十升。唐代の一斗は、約六リットル。

●可：おおよその数量を表す。～ほど。

●俄：たちまち。

●殿簷：宮殿ののき、ひさし。

●美姿容：容姿がうるわしい。みめうるわしい。『三國志』巻二一・魏書二一・衛覬傳・裴松之注「岳別傳曰、（潘）岳美姿容、夙以才穎發名。其所著述、清綺絶倫。」

●旨趣：学説などの内容、意味。ここでは、人となり、風格のような意味に解す。

●雅淡：上品で物静か。

●言詞：ことば。言葉遣い。

●清爽：垢抜けしていてさわやか。

●礼貌：礼儀正しい顔つきや態度。

●臻備：完全に備わっている。

●侍立：恭順な態度でそばに立って控える。

●宜：～するのがふさわしい。
●目：観察する。注視する。
●失：誤る。失敗する。
●龍顔：天子の顔。
●一笑：ひとわらい。
●致：まねきよせる。求める。獲得する。
●頂：頭のてんっぺん。
●冠子：冠。
●榼蓋：酒樽のふた。
●嬪御：皇帝の側に仕える女官。皇帝の侍女。宮女。
●験：調べただす。
●窮紀：記し尽くす。全てを記録する。陸機「呉趨行」「淑美難窮紀、商推爲此歌。」李善注「賈逵國語注曰、紀、猶錄也。」（『文選』巻二八）

【原文】

有師夜光者、善視鬼。玄宗常召果坐于前、而敕夜光視之。夜光至御前、奏曰、「不知張果安在乎。臣願視察也。」而果在御前久矣。夜光卒不能見。又有邢和璞者、有算術。毎視人則布籌于前、未幾、已能詳其名氏、窮達、善悪、夭壽。前後所算計千數、未常不析其苛細。玄宗奇之久矣。及命算果、則運籌移時、意竭神沮、終不能定其甲子。

【書き下し文】

師夜光なる者有りて、善く鬼を視る。玄宗　常て果を召して前に坐せしめ、而して夜光に勅して之れを視しむ。夜光　御前に至り、奏して曰く、「張果の安くにか在あるを知らざるか。臣　願くば視察せん」と。而して果は御前に在ること久し。夜光　卒に見ること能わず。又た邢和璞なる者有りて、算術有り。毎に人を視れば則ち籌を前に布き、未だ幾ばくならずして、已に能く其の名氏、窮達、善悪、夭壽を詳らかにす。前後算計する所は千をもって数え、未だ常に其の苛細を析せざるはあらず。玄宗　之れを奇とすること久し。命じて果を算えしむるに及べば、則ち籌を運らすこと時を移し、意竭き神沮け、終に其の甲子を定むること能わず。

【大意】

師夜光という者がいて、霊視能力を持っていた。玄宗はあるとき張果を召し出し御前に坐らせ、師夜光に命じて張果を霊視させた。師夜光は御前に進み、申し上げた、「張果はどこにいるのでございましょうや。臣はしっかりと霊視致したく存じます。」しかし張果は陛下の御前に長い間いたのである。師夜光は最後まで張果の姿を見ることができなかったのである。次に邢和璞という者がいて、占術をよくした。人を占うときはいつも算木を前にならべ、ほどなくしてその姓名、困窮と栄達、運命の善し悪し、寿命を詳しく明らかにした。占った人は通算千人にも達し、いつも微に入り細に入り解き明かしてしまうのだった。玄宗は、ながらく邢和璞を尋常ならざる者と考えていた。そこで命じて張果を占わせることとなったが、算木を動かしてしばらくたったが、精根尽き果て、とうとうその年齢を決めることはできなかった。

【注釈】

●視察：よく見て調べる。
●算術：計算による占術と解す。
●籌：かずとり。算木。数をかぞえる竹の棒。
●名氏：姓名。
●窮達：困窮と栄達。
●算計：計算。ここでは、「算」と同義で、占うと解す。
●苛細：極めてこまかい。
●析：ときひらく。解き明かす。
●移時：しばらくたつ。

【原文】

玄宗謂中貴人高力士曰、「我聞神仙之人、寒燠不能瘵其體、外物不能浼其中。今張果、善算者莫得究其年、視鬼者莫得見其狀。神仙倏忽。豈非眞者耶。然常聞謹斟飲之者死。若非仙人、必敗其質。可試以飲也。」會天大雪、寒甚。玄宗命進謹斟賜果。果遂擧飲、盡三巵、醺然有醉色。顧謂左右曰、「此酒非佳味也。」卽偃而寢、食頃方寤。忽覽鏡視其齒、皆斑然焦黑。遽命侍童取鐵如意、擊其齒盡、隨收于衣帶中、徐解衣出藥一貼、色微紅光瑩、果以傅諸齒穴中。已而又寢、久之忽寤、再引鏡自視、其齒已生矣。其堅然光白、愈于前也。玄宗方信其靈異、謂力士曰、「得非眞仙乎。」

【書き下し文】

玄宗　中貴人・高力士に謂いて曰く、「我聞く　神仙の人　寒燠は其の体を

瘵しむること能わず、外物は其の中を浼すこと能わずと。今　張果、算を善くする者も其の年を究むるを得る莫く、鬼を視る者も其の状を見るを得る莫し。神仙は倏忽たり。豈に真なる者に非ざるか。然れども常に聞く　謹斟は之れを飲む者は死すと。若し仙人に非ざれば、必ず其の質を敗らん。試みに以て飲ましむ可し」と。会たま天大いに雪ふり、寒きこと甚し。玄宗　命じて謹斟を進めて果に賜わしむ。果　遂に挙げて飲み、三巵を尽くし、醺然として酔色有り。顧みて左右に謂いて曰く、「此の酒は佳味に非ざるなり」と。即ち偃して寝ね、食頃にして方に寤む。忽ち鏡を覧て其の歯を視れば、皆な斑然として焦げて黒し。遽やか侍童に命じて鉄如意を取らしめ、其の歯を撃ちて尽くし、随いて衣帯の中に収め、徐に衣を解きて薬一貼を出せば、色は微かに紅く光瑩なりて、果　以て諸歯の穴中に傅く。已にして又た寝ね、之れを久しくして忽ち寤め、再び鏡を引きて自ら視れば、其の歯は已に生えたり。其の堅然として光白なること、前より愈るなり。玄宗　方に其の霊異を信じ、力士に謂いて曰く、「真仙に非ざるを得えんや」と。

【書き下し文】

玄宗は寵愛している宦官の高力士に言った、「私はこのように聞いたことがある。神仙となった人間は、暑さ寒さもその身体を苦しませることはできず、その心身の外にあるものによってその内側を汚すことはできない、と。今や張果は、占いができる者でもその年齢を調べ尽くすことができなかったし、霊視ができる者でもその実体を見ることができなかった。神仙は時間の流れも速く、行動も速やかである。張果は本物の神仙ではないだろうか。しかし私はトリカブトの煎汁を飲んだ者は死ぬとつねづね聞いている。もし張果が仙人でないならば、必ずその本質を損なうはずだ。試しに飲ませてみるのがよい。」おりよく大雪が降り、とても寒くなった。玄宗は臣下に命じてトリカブトの煎汁を張果に届けさせ飲むように賜った。張果はそのまま煎汁の入れ物を持ち上げて飲み、大盃で三杯を飲み干し、機嫌良く酔っ払っている顔色であった。張果は振り返ってまわりの弟子達に言った、「この酒は良い味ではない。」するとすぐに寝転んで眠ってしまい、しばらくしてようやく目覚めた。ふと鏡に映して歯をよく見ると、すべてまだら模様に焼け焦げて黒くなっていた。張果は、すぐさま仕えているわらべに命じて鉄の如意を渡させ、自分の歯を打ち付けてすべて折ってしまい、そのあとすぐに着物の帯にしまい、ゆっくりと服を脱いで薬を一つ出すと、その色はほんのりした赤で光り輝き、張果はそれを全ての歯の抜けた穴に塗った。そうして再び横になって眠り、ずいぶん経ってから突然目覚め、もう一度鏡を引き寄せて自分の顔をよく見ると、歯はすでに生えそろっていた。その堅く白く輝くさまは、焼け焦げる前にまさっていた。玄宗はそこではじめてその超能力を信じ、高力士に「正真正銘の神仙でないはずはない」と言った。

【注釈】

●中貴人：宮中で皇帝の寵愛を受ける者。主として宦官。
●寒燠：寒さと暑さ。
●瘵：傷つけ損ねる。病。
●外物：自身の心身の外にあるもの。『荘子』外物篇「外物不可必。故龍逢誅、比干戮、箕子狂、悪來死、桀紂亡。」
●浼：けがす。汚。
●神仙倏忽：「倏忽」は、すみやか、にわかの意味。この文、意味がよく分からない。大意に示したように解す。
●謹斟：トリカブトの煎汁。「謹」は、両『唐書』張果列傳から考えると「堇（トリカブト）」であろう。「謹」は「堇」に通じるが「堇」とは別字である。なお「堇」と「堇」とは混用されている。「斟」は、飲み物。
●質：本質。根本。中身。
●進：ここは、贈る、届けるの意味に解す。
●酔色：酔っ払った顔色、顔つき。
●偃：仰向けに寝る。寝ころぶ。
●食頃：食事をするくらいの時間。しばらく。
●斑然：まだら模様のあるさま。
●侍童：給仕としてそばに仕えるこども。
●随：そのあとすぐに。
●解衣：衣服を脱ぐ。
●貼：数詞。ものを数える単位。
●光瑩：光り輝く。
●光白：白く輝く。張協「七命八首」其五「大夫曰、楚之陽劍、歐冶所營。……光如散電、質如耀雪。」李善注「莊子曰、此劍一用、如雷霆之震也。魏

文帝大牆上蒿行曰、我帶長寶劍、光白如積雪。」（『文選』巻三十五）

●霊異：神秘的で不可思議。

【原文】

遂下詔曰、「恆州張果先生、遊方之外者也。跡先高尚、心入窅冥。久混光塵、應召赴闕。莫知甲子之數、且謂羲皇上人。問以道樞、盡會宗極。今則將行朝禮、爰申寵命。可授銀青光祿大夫、仍賜號通玄先生。」

【書き下し文】

遂に詔を下して曰く、「恒州の張果先生は、方の外に遊ぶ者なり。跡は高尚を先んじ、心は窅冥に入る。久しく光塵を混ぜ、応に城闕に召くべし。甲子の数を知る莫く、且つ謂う　羲皇上の人かと。問うに道枢を以てすれば、尽く宗極を会す。今則ち将に朝礼を行ない、爰に寵命を畀えんとす。銀青光禄大夫に可とし、仍りて号を通玄先生と賜う」と。

【大意】

そして玄宗は詔を下して述べた、「恒州の張果先生は、俗世の外を自由に行く者である。その行ないは、天子に仕えることより高潔さを優先し、その心は、奥深い境地に達している。長らく優れた風采を維持し、都城に招聘して臣下としなければならない。その年齢は不詳であり、また聖天子・伏羲の時代の人かと思しい。道のかなめについて尋ねると、ものごとの根源を余すところなく会得している。今　朕への拝謁の礼を挙行し、ここに寵愛の意を以て命を与える。銀青光禄大夫に任じ、よってここに通玄先生の称号を下賜する。」

【注釈】

●方之外：「方外」に同じ。『舊唐書』張果列傳の「方外」の注を参照。

（待続）

（中国文学）

Translations and Notes of Documents Relating to Zhang Guo 張果 Part1

Yoshiharu KAWAGUCHI
(Chinese Literature)

Abstract

Zhang Guo 張果 is well known as one of the Baxian 八仙 or the Eight Immortals of Daoism.

This paper contains the following translations and notes of documents that are fundamental to research relating to Zhang Guo:

(1) Jiutangshu Zhang Guo zhuan 『舊唐書』張果傳
(2) Xintangshu Zhang Guo zhuan 『新唐書』張果傳
(3) Xintangshu Yiwenzhi 『新唐書』藝文志
(4) Songshi Yiwenzhi 『宋史』藝文志
(5) Quantangwen Zhang Guo zhuan 『全唐文』小傳
(6) Quantangshi Zhang Guo zhuan 『全唐詩』小傳
(7) Taipingguangji "Zhang Guo" 『太平廣記』「張果」
(8) An episode of Xuanshizhi『宣室志』in which Zhang Guo is the lead character.
(9) Li Qi "Ye Zhang Guo Xiansheng"(verse) 李頎「謁張果先生」詩
(10) Zhang Guo "Daoti Lun Xu" 張果「道體論序」
(11) Zhang Guo "Huangdi Yinfu Zhu Xu" 張果「黄帝陰符注序」
(12) Zhang Guo "Taishang Jiuyao Xinyin Miaojing Xu" 張果「太上九要心印妙經序」
(13) Zhang Guo "Ti Dengzhendong"(verse) 張果「題登眞洞」詩

This paper is divided into 3 parts. Publication part 1 is (1) – (6) and most of (7). Publication part 2 includes the remainder of (7), and (8) and (9). Part 3 is (10) – (13) next year.